

キャンペーン「状況67」

その視点と課題

彼女は……

つい最近、私はあるサークルの短大の一年生と話をした。彼女は、大学へ入ってから写真を撮りはじめたので、サークルでの活動はまだ半年をそこであった。彼女はいま、写真を撮るといふ活動のなかで「現実を知りたい」と思っている。この現実のなかで生きていながら、あまりにもこの現実を知らないままで過してしまっている、と気がついたからであった。地方から東京へ出て来て以来、彼女の周辺はかなりの変貌を示し、しかも目まぐるしく動いていった。鉄とコンクリートの固まりのようなビルディング、人の流れが潮流のように渦を巻いている街、電車のなかで自分を見つめる他人の冷たい視線、第一、大きな教室で受ける大学の授業からして、どうも彼女にはしっくり来ないものがあつた。それらのこと「そんなあのあたり前のごよう」などという気になど、彼女にはとてもなれなかつた。それをいってみたところで、なんの解決にもならないとおもわれた。そんななかで、彼女は写真を撮った。人間を見つめてみた、この大都会の街のなかで黙々と、しかし真剣に生きている人間……。できあがつた映像は私たちにとってまったく日常的に見かける光景であつた。毎日見られぬが接していることであつた。ところが、その映像からは彼女のこの現実のなかに生活する

視点・捉え方が刻明に感じ取れるのである。彼女にとつてそれは現実と直接向かい合つたとはじめての体験であつた。そして、このときはじめて、彼女は写真を撮ることのある手ぶえが、重みが感じられた。そのように写真活動をつづけた彼女は、あるとき漠然とではあつたが、ある疑問が湧いてきた。「今やっているこの活動を、卒業したらどのようにやっていたら良いのだろうか」彼女は以前から、短大から四年制への編入という問題を考へていた。編入試験に合格する自信はあるが、もし失敗すれば、その疑問は即座に彼女の直面する問題となる。自分自身を見つめ、この巨大な現実にあタックし、そしてこの現実の中で、自分が一体どこに居るのか、その位置関係をはっきりさせ、そして自分が何をやるべきなのかを見つめようとして、懸命に活動している彼女には、卒業したからといって、それを「ハイ、サヨウナラ」と紙くすを捨てるように放棄してしまう訳にはいかなうと思えるのである。彼女は、そのことを考えれば考えるほど、自分が一体どうすべきなのかを問はる間ほど、学校で受けている授業が、自分の本質的な問いかけに對して、なんにも答えてくれるものがないのではないかと、ということに気がつき始めた。今サークルでやっている、自分にとつてかなり重要な活動、

係、更に授業との関係、彼女の心には複雑な形でこれらの問題が入り組んでいた。やがて、これらのことをはっきりさせるのでないか、その絶好の機会を、彼女はつかんだ。それは、短大生と教授が一緒に台合をして、いろいろな話をすること、という大学の行事であつた。他の短大生は、自分が抱えているような問題をどう考えているのだから、それに、日頃授業で興味深々い話をしてくれる教授とも、話をしてみたい。彼女は、この種の行事に何度も苦い味をしめている先輩連中の言うことも振り切つて、勇んで出かけた。そして、教授にその卒直に自分の問題を話した「卒業してからのことを考えると、どうも授業に身が入らない」と。するのとは返事はただのひとこと「そんなことは考えなくていいんです。もっと勉強に専念しなさい」これがその教授の回答であつた。まわりの短大生は、そんなことはまるで問題にならないという態度であつた。教授も、まわりの人々も、「女の子はそんなことを考えなくていいの」とでも言わばなかばかりであつた。彼女のこの会合に對して持っていた期待は、一瞬の間、に、しかも決定的にくつがえされたのである。

彼女にとつて、「卒業してからどうするか」という問題は、実に具体的なこととして、實際的なこととして彼女の中に存在している

るのである。彼女が前述のように、現実の中で自分の位置関係を、はつきりさせようとする時、あるいは、その関係の中から自分のやまへき（と）（行為）を見つけ出す時、とする時、彼女は編入の問題、卒業してからの問題を棚上げしてしまつておくと、これはできないであらう。なぜかと言ふならば、現実について、その彼女の現況、あるいは現実、対する彼女の現況、あるいは現実、の中では彼女の位置関係といふものは、彼女を取り巻いてさまざま、さまざまな具体的事実と、彼女との関係の中から始めて生れるものであり、また構築されてゆくものだからである。そして彼女が、この外から状況を構成しているところの、その具体的な事実に対しては、それに對して二つ二つ決定を下してゆく時、彼女は彼女自身の「生き方」を、強めてゆく（志向する）ことになるのである。それが、彼女が（勿論、私たちが）問うている本質的な「生き方」の問題なのである。従つて、「生き方」の問題とは、自分と具体的に外部状況との対決なのである。机上で自分の未来の設計圖をこねくり回すことではない、著名な人物の文章・論理を拝借して押し預へることでもない。しかも、その二つ二つの決定（行為）は、この一九七〇年の現実の総体——それは現実に對する、ある漠然としたイメージを指すのではなく——に見合ったものの、對向で生得るものでなければならぬであらう。すなわち、この現実に対決し得るだけの有効な行為でなければならぬ、といふことである。そのような行為でなければ、私たちは具体的な外部状況の前で一生懸命叫んでいる、爪と齒をもぎ取られた虎も同然である。何ら外部状況に食ひ入ること、はできないのである。

（二）で私たちは、彼女について、もう二つのことに注目しなければならぬであらう。それは、彼女の抱えている問題、「卒業してからの生活」である。この二つの持たざるものか」といふことの意味である。これは、彼女だけが持っている問題ではない。

もない。そのようにあって良いはずがない。従つて、当然彼女と同じ問いかけが自らなされるのであるであらう。『二現在の活動を、生きるという行為を、どのように継続させよう展開させようか』と。

キャンパーン

彼女の「卒業してからどうするか」という問題について、私たちが「組織内部の問題」といふ視点を、また個人の問題として片づけてしまふ訳にはゆかないであらう。なぜならば、それはサークルという、全日本学生写真連盟という組織の外部との直接的な接触がなければ、何ら解決し得ない問題だからである。では一体、私たちは、このような問題をあまやか上で、どのような活動を通じて、いつた良いのであろうか。

一九六五年、私たちの活動の出発点となったキャンパーン「状況一九六五」に於いて、二つの原則があった。一つは、文化サークルの原則である。『最終決定権は個人に』と、一つは、写真の原則である。『カメラマンが自分と現実との対決に対しての興味（問題意識）をもたない時、決して作品は誕生しない』と、二つの原則である。この原則はキャンパーン「六七」に於ても、依然としてその根本として設定されていることであるが、私たちは、この「自分と現実との対決」の意味を再度問い直さなければならぬ時期にある。すなわち、一九六五年以来、現実の様相はますます複雑化し、巨大化していつているにもかかわらず、私たちがこの現実に対する行為（対決）は、ますます具体化してゆかぬねばならないというところである。「この石をここへ動かす、つきにこの根を二本切り、といったぐあいには、一人一人が自分の問題、自分たちの問題とテーマにとり組んでいかねばならないのだ」——状況一九六五——をして、その具體的行為（対決）は、現実の全体へ向つて止揚されるものではない。

一九六七年という現象にどのような有効であるのか、ということになる。逆に言えば何をどのようにすれば、どこをどう動かすことができるのか、ということなのである。私たちににとってキャンペーンは組織の運動として明確に設定された時に初めて成立した。個の存在の深化とその組織化が、いつてみれば、この運動の根底をなすねらいである（状況一九六五）そしてその組織の運動は、一九六五年の状況に対応して、まず自身を革新し、さらに組織内部を（サークルを、全日本学生写真連盟を）徹底的に革新して行く作業にとりかかった。上から下への命令形態を、下から上への形態、あるいは全員が同次元にある形態へと、彼女の真剣な問題が一笑に付されてしまった、あの短大生の令台と同じような形態から、彼女の令問題正面から受けとめ、自ら生きていることを問いつける形態へと……。その運動は一九六六年へと繰り続けられ、当然これからも続行される作業である。しかし一九六七年、この運動に参加した一人一人が、「可貴なく自己に疑問を課し、それを解き明す作業」を展開する中でその一人一人が、ある確かな広がりをもって、つながり始めることが出来るようになった（二面を参照）。そういった時点で立つた現在、私たちは、私たちの組織の運動の視点を、いつまでも内部へ向けておく訳にはいかない。

個人にとって、現実に対する有効な行為が求められている現在、私たちの組織の運動を、はつきりとした外部状況に對峙させてゆく必要があるだろう。組織内部でしか通用しなくなつた言葉（活動運動）、自然と内側へ向つて循環運動を始め、その閉塞された状況の中でこの循環運動は、いつの間にかその言葉を消滅させる。あるいは、その形骸化されたものだけが残る。それが、私たちのやうな運動とどういふ関係にあるのか、ということには、明確であらう。

が組織としてこの現実の総体をとらえて、具体的な外部との対決に当たってそれを動かした時、初めて運動が運動本来の意味を獲得し、組織が組織としての意味をなしてゐるのである。

（く）身近な所で例を上げてみよう。例えば、大学祭はどうであらうか。大学祭は単なる写真展の場としてのみ存在するのであるのか。他の文化サークルとの接衝の機会をつくり得ないのか。写真展示の他に企画は立てられないのか……。それは単に目新しいことを見つけ出すことではない。私たちの運動が、あらゆる既成のものに対して疑問を付し、状況の厳密な、しかも迅速な分析・検討のものとに、この既成のもの否定的の上に私たちの方法を打ち立てて来ないことを忘れてはならない。今私たちは、組織の外部に対する行為を起すに当たって、明確な意識のものを、にその作業をすることを求められてゐるのである。

前進！

キャンパーン「状況」九六五

以来、私たちは「人間」に対する本来的な問いかけの中から、自分と現実との対決関係を写真活動をやめる中で問い続けて来た。現在写真の問題が、何を対象とし、どのような様子を撮るのかを問い、生き方の問題と深くかかわって来ている時。三面以降参照）、私たちは次のような問いかけをしなければならぬ。私たちが生きている中で、自分に（組織にとって）この問いかけの現実に対する有効な行為とは何かを求めている。組織にとって外部への運動を如何に（つくり）上げるか。キャンパーン「状況」九六七は「この問いかけのもとに活動を開始しなければならぬ。」「状況」九六五の出発以来、継続・展開されて来たこのキャンパーンは、今までに大きな転換をしようとしてゐる。私たちは、以前よりまして自分自身に対して「自己打ち、拍車をかけなければならぬ。」

前進！

今、私たちの多くがこの問題と直面している。私たちが写真活動において、この現実の中でどのように生きるのかを問う時、私たちの生きざらという行為が、学生時代だけのことでして終るはずがない。また、学生だからできるのだから、学生時代の思い出つくりとして、学生時代の思い出つくり味は、私たち一人の行為が、

ければならない。でなければ、つまり、トータルされることのない、散落的で分散的行為であるならば、この現実に対しては何の有効性も持ち得ない。

従って、「状況一九六七」に於ける「自分と現実との対決」の意

私達の今までの活動がそうであつた訳ではない。外部との対決は頻りにあつたと言つ方が正確である。その度には、厳密に測定され、決定が下されて来たのである。しかし、組織としてはきつとりと取り組むということが、なかなかできないというのである。――私たち

前進！

キャンペーン「状況一九六五」

私たちは「人間」に対する

本的な問いかけの中から、自分

現実との対決関係を写真活動と

の中で既に纏ひて来た。現在

の問答は、何を文藝とし、どの

深くかかわつて来ている時

面以降参照)、私たちは次の上

な問いかけをしなければならな

私たちが生きていく中で、自

にとつて（組織にとつて）この

美に対する有効な行為とは何か

して、組織にとって外部への運

を如何にくり上げるか、キキ

「一六七」は

「大兄一九六」

の出発以来、継続・展開され

またこのキャンペーンは、今ま

に大きな転換をしようとしてい

私たちは、以前よりまして自

自身に対してムチ打ち、拍車を

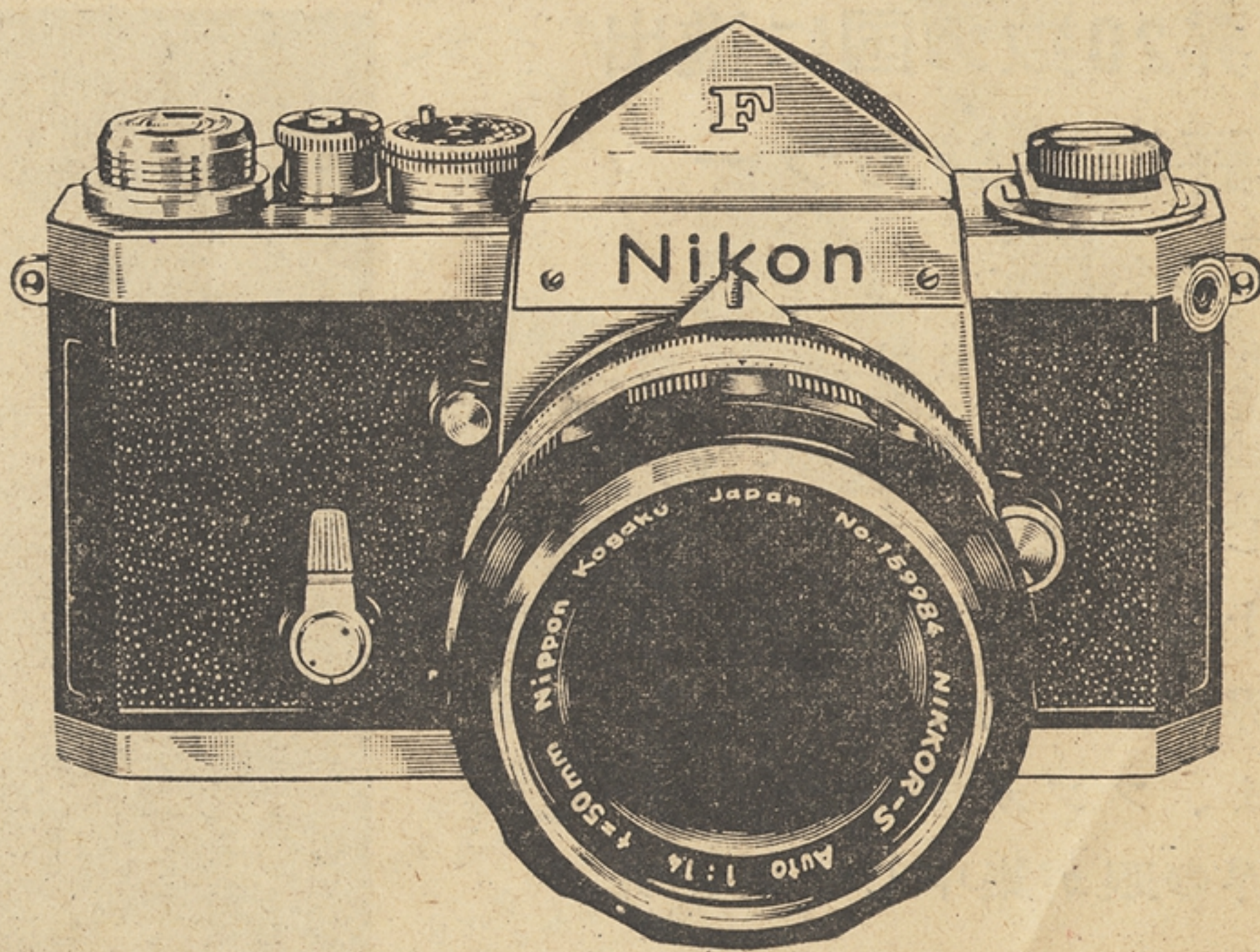
いなければならぬ。

前進！

1

■カメラはニコン メガネもニコン

世界一を結集したカメラ＝ニコンF
万能を追求するかたのために
シャープなニッコール交換レンズと
あらゆるアクセサリを完備しました



ニッコールオート50ミリF2付き……¥58,700
ニッコールオート50ミリF1.4付き……¥67,000
ニッコールオート55ミリF1.2付き……¥79,300
皮ケース………¥2,500より

Nikon F

日本光学工業株式会社 東京都中央区日本橋西川ビル

キャンペーン活動

写真選撮合宿

的に展開していくために、なるべく多くの人々が参加出来るように三回写真選択会を行なう方法がとられる。

また、いままでは、地区キャンペーン委員会は、キャンペーン活動で明らかにすることがない。会合

市販・展覧会

一九六五年、日本の現実の中に
おける人間のあり方を問うことの
運動を開始した時、'65、'66の活動
が、結果的には連盟内部の問題で
しかなかったが、現在、写真の方

行事經過及び予定

東) 写真選 折合宿

西地

一泊九八〇円×4十百円（諸経費）

富士フイルム

「このごろいつも店の夢を見なんだ。夢の中の俺はまだ、背丈がケースまでぐらいいかなな子供なんだ。だからケースを見上げるとケースの中の蛍光灯が直接目の中に飛び込んでくるんだ。そしてあのケースの前を曲がると、通いなれた小学校があり、こっちのマネキンの裏に行くくと、遊びなれた広場があるんだ。高く積まれたたんもの谷に一人佇むというにえない庄田感を感じてんだ。そして振うと思うととんに、店の中のいろいろなものが、自分の存在を主張しだすんだ」(大西忠保)

これらのことは精神分析学からいったら、常識ともいうべきでもないことだが、人間だれもの中に大きな比重を占めて存在していることだ。それらを自分の問題として対象化しようといった試みは、われわれにとつては現実が証明

のだから。

当時われわれは、それらの振りが必要だということを、今日いわれている「方法の問題」という体系の中で感じていた訳ではなかった。

しかし極めて単純ではあったが「方法の問題」がそこでは「現実」ということは同様ことはならない何かとして、家を撮る者皆の中に存在していた。

だが、先的小林氏のごとくにもあるように、あの時の家には限界があった。その意味であの時の家は正確に批判されなくてはならぬ。

そしてその批判は、『前半の批判』となるだろう。なぜなら名実ともに『節』のりこえたものは八咫孺・丸山氏・八夏の街・大西氏・に求められなくてはならないからだ。それを『後半』と呼ぼう。

へという視点は一〇において、
 則ちから展開、が不可欠であつた。たうに——絶体必要だつた。が、
 ち打たてた金字塔がいかにも偉
 穴であらうともわれわれは、とど
 まることは許されない。われわれ
 は家で打ち立てた写真とわれわれ
 の關係をさらに、のり越え、造り
 変えてゆくことが不可欠だつた。
 こととどまることは絶対に許されな

66 後半視点

後半の課題であり視点でもあつたものは、この現実を總体的に
 志向することだつた。家の個性
 の限界を見、それをのりこえるた
 めにはこの總体を志向しなくては
 ならなかつたからだ。そこで、問
 題点と境界は後で述べるとして、
 ここでは、に載つた八夏の街に
 当時のわれわれの写真に対するあ

前にテールとコップがあった。テールもコップも僕が触る直した。僕は、コップを取り直した。コップは、ふわふわとあちちと散らばっていた自分の存在をあわててかき集め、自己の内を縮した。僕は、水を飲んだ。僕の体内に入っても僕にはなかった。水は、のどにひっかかり、食道の壁をぬらしながら胃へ入った。恐かった。僕の事物へ視に水が反響して、気管になだれ、み窒息させるのではないかと、僕は目隠しをされて事物の射撃をうけているやうだった。の一本一本はそれぞれの弾丸を出した。僕の体は穴があき、チの果のようになった。煙は、らゆる傷口から体内になだれだ。いろいろな色の煙は体内に合された。それは僕と合体し、それに染められ、僕の体

のがついていた。爪だった。エ
ニールのように光っていた。
鈍く光るそれに僕は見覚え
があった。僕は僕の体内を事物
しているのに気がついた。あ
恨み、正体をあばいてやろう
ついていた事物に。僕は叫んだ
ひきようた。なんてひきよ
うた。僕は僕が事物であること
慢がならなかった。僕は外に
た。
強く日射しの中、まぶしさに
けこみ自身になり切れる為
あてもなく歩いた。道の口
んづける為。単なる意識体
元されたかった。僕の意識故
の存在を僕自身に引き受ける
な僕にならかった。

夜になった。夜のどろりが
て僕以外の事物は生気を失っ
まぶしさのフィルターは取り
れ、暗さがそれに代った。暗

は。　　しかし光の中、浮んでは消えては浮き影のようなゆきついて、それらの人々が事う違ふのか、そして僕は、の人々と事物がどう区別された知らなかつた。尤、僕らの人々を事物と見なしたというところである。絶体事物とみなすことは僕も見なされることになる。

僕は、自由な意識体だ。そうだし、互にそうみなした。写真を撮るにしても撮っているんですか。何のなどと聞かれたくなかつた様に僕も他人を人間としてければならなかつた。そうと僕が事物化してしまふ。自由を認めた上でなければ

われ自身を生かしてい
現実を一挙に明かに
た。その中で、われわ
目的文化の限界までも
かった。といひてゐる
この誤謬は対象を変
方法を変へようとし
いつこにつぎぬ。こ
だつた。対象の転回
方法の展開 いまでは
のが、當時は、ま
人間に生づる作風があ
に、ひとつの方法に固
れれば見落したのだ。
僕たちの関係というの
係なのだ。 たがいに動
現実は、どんなに変わ
僕たちも変つてゆきそ
と月が、地球は自転し
のまわりを動く。

(六面)

不透明な
花かった
自身を今
ていきた
る。）そ
ははしたが
かかったと
は決定的
もなう、
識的なこ
たく確認
で一人の
かかかのよう
した。わ
「現実と
相関関
んだな、
ゆくし、
は、地球
がら太陽

計出露



セコニック
スタジオデラックス
L-28C

発売元 株式会社 コパル

発売元 株式会社 コパル

日本

● この写真集は時間の風化作用を受けて変化した日本と変化しなかった日本が微妙に混り合う

● この写真集は厚い化粧におおわれた日本の裸身 戦後日本にみる深い深い傷口である

● この写真集は高度成長下 日常生活の中に埋没して見失われてゆく日本の原点をわれわれに指し示す

総グラビア200ページ

吹きだまり・恐山・アスファルト風景・まち
・ghost town・チンドン・家・占領

右記の写真集のお申し込みは、振替又は現金書留で冊数・学校名・送り先を記入の上お申し込み下さい。

全日本学生写真連盟

東京都新宿区三栄町二五・三栄会館内
電話 (三三三) 九四四二
振替東京一一〇八五

をしなかつた。彼は、大氣と、**た**それがこれにつまれた対象のまわりを彷徨した。彼は暗闇と透明の奥に、さまざまな色彩の鼓動をつかみ出して、彼の沈黙のシンフォニーの見える中心を作り上げた。——この世界の中に、フィルムとフィルムが互いに忍びこみ合い、秘やかにして絶えざる進歩により、そのいかなる衝撃も進行を告げ、あるいは中断させたりするのではない、神秘的な交換をのみとらえたのであった。——

それはあたかも、表面をすべりいく大氣の波が、目に見える発散によつて、その表面を規定し、かたちづくるために浸透していくか、こちらとこちらに芳香のようにひろがり、はかり知れざる埃となつて、それをとりまく空間のひろがり全体の上で分散していくのであつた。

（氣狂ヒエロ——世画繪圖史）

「だがその声は爆弾の轟音をも圧するものではないなくてはならない。その言葉は人間の心を溶かしその血を沸き立たせるものでなくてはならない。」（H・ミラー）

以上が「振るとは何か」に対する我々の現時状況の外輪である。我々のこの精神の闘いはこの状況がある限り、人間が生きている限り続行されるだろう。だがそれは我々がこの生きる行為（振るとは）で本来を体現してゆくものでなければならぬ。我々の生きるべき時代は「この行為ですべてが明らかになる」とは何もない時代である。それは我々のこの行為が歴史を造るものであつても、またかなものでもなく、このことだ。自らに疑問符を課せようという問も、「そうだ。僕は地中海の水平線に面した、大きな疑問符にしかすぎないのだ」というゴッタルのこぼれと同じことかもしれない。だがそれは今日が明日もいい。我々は今今日があり明日もある。それらをこの与件の中で秘密に展開するといひしか、明らかになるものは何もない。「振るとは何か」という問に我々はまた完全に答えていない。我々は後更にこの問題を展開し、この現実の泥にまみれて生きているすべての人々が自らの問題を未来に向けて展開すべく振る中で、それらの具化に役立てばと願うのである。

この空洞状態からぬけでるために

画面中央部の光を焦点面で測る
焦点測光 T T L——平均測光
では非常に困難な被写体その
ものを測光するキヤノン独自
の機構。むずかしい逆光も一発
です。絶対に失敗が許されな
い唯一のチャンスも決して逃
すことはありません。



FL58mm F1.2 付	現金正価 ¥66,800
FL50mm F1.4 付	現金正価 ¥54,800
FL50mm F1.8 付	現金正価 ¥45,800
ソフトケース	¥ 2,400
キャノンブースター	¥ 9,800

キヤノンコンパクトレンズ
望遠 FL135mm F3.5 (ケース付) ¥16,900
望遠 FL200mm F4.5 (ケース付) ¥19,900
ズーム FL100~200 F5.6 (ケース付) ¥29,900

キヤノンカメラ株式会社

ル員から抽出される問題性の上に
立脚し、その問題を論議し、より高
次のものへと創造して行く機関で
ある。従ってその構成員は、やた
らに多数に及ぶ事はなく、本当
に問題を創造して行ける人間に絞
られて行かなければならない。
今まで夏休み、試験、大学祭、キ
ャンペーンについて幾つかのサー
クルの具体的な方法と共に語って来
たのであるが、これらのサークル
の方法もそれが実質的にその時期
に於て有効なプランとして企てら
れるには、そのサークルに必ずサ
ークル員一人一人の問題の総合さ
れた全体の問題と認識して行
く人間が存在しているからであ
る。
(会報60号「論議」参照)
この様にサークルの問題性にお
ける位置が定まってきた時、では今
に於けるこの日常活動と前述し

る様々な問題がどの様に一つのサ
ークルの中でそのサークル独自の
方法で組み上げられるか、この
時期のサークル活動が空想的で
終わってしまうか、もしくはその状
態を抜け出す事ができるかの全て
が決まってくるのである。
6 終りに
ここで再度確認しておきたい事は
私達の今までの活動が、その原則
である「サークル」という事を
最終決定権は個人に」という事を
どの位認識できているかである。
というより、サークルに於てその
構成員である一人一人がどの位自
分の問題の一つ一つを認識でき
ているか、又その一つ一つとして
あるか。
この様な事を確認した後これか
ら私達の活動が広範囲に及ぶはな
らぬ一つのサークルに於けるその

前に、なにかいってしまつて
いるのか。おびただしい情報量や
複雑に体系化された組織機構、過
去から現在へ、現土から未来へ、
いや、そういう方向よりも、逆に
最近では、未来から現在へ、現在
から過去へ、無数のにめぐら
され、からまりあい、接続と癒着
と、根柢と萌芽と、薩散や偽装や
奸計や詐術でおおいつくされ、混
然と成りていく。空をかくし地を
うめつて隠れているこの現実のジ
ヤングルのなかで、しかし、われ
われはなにかを、小さな一つの確
かなものから、別な小さな確かな
ものへとつないでいくの意欲がな
い。そんな作業を始めたはずなの
である。
そのときだ。いまだ漠として
理想のなかに燃焼するように、人
々の幻想と愛着のなかに存在して
いたはずの東松照明の仕事が、パ
ルセロナに遷るガウディの「聖
家族教会」の尖塔のように、実
在するわれわれのジヤングルのさ
なかに、数々の、塔をおしなべて
時立するの。
なぜ、どのようにしてこの異端
の塔(とりで)が、このような現
実のなかに、このように異様に
まさに正當に立ち上つたのか、と
あるのか。それは今日のわれわれ
にとって、どのような意味をもつ
のか。われわれはそれをこのよう
に受けとらなければならないのか。東松照
明写真集「日本」を中心に、でき
るかぎり、その意味と視点を明ら
かにしたい。
3 東松照明写真集
「日本」
この写真集には、一九五五年に
岩波写真文庫になった「おりのも
のまじり」のようなものから、六七
年、現在でも進行中の砂川の集地
闘争の写真をふくめた「占領」ま
で、十二年におよぶ年月のあいだ
に、彼によって切りとられた現実
の諸断面が収録されている。収録
されているというよりはむしろ、正
しく、「占領」をはじめとして、
「吸きたまり」「ghost town」
「家」「恐山」など、いづれも
未発表のもの、新たに撮られたも
のをふくめて、すべてあたらしく
構成されたものであり、今日の時
点で構成したうえで総題である
「日本」の名を冠したのである。
日本——この歴史と現代との混
雑をきわめた野合の結果を、一つ
一つ鋭く深くえぐりつづけてい
った一つの結果がここに展開され
ていく。彼がその一つ一つをど
ういった十三年という年月が、
日本にとって、われわれにとって
どのような年月であったか、その
間にとどのような出来ごとが起り、
さらに起り、交錯し、幾重にも重



↑東松照明写真集「日本」—占領より東松照

明写真集「日本」が出版された(11時02分) NA
GASAKI とともにこの写真集の現代にもつ
意味は大きいここに福島辰夫氏の評論を掲載
しサークル・個人の書架に加えられることを
おすすめしたい(5面広告参照) —編集部

東松照明写真集『日本』への 絶大な讃辞とその広告

—現代を考えるいくつかの起点—

福島辰夫

1 青ずんだそれで
いてどこからうれ
げな顔

歴史がふしぎな回廊をたては
じめてから、私の記憶をたどるた
けでも、すでに恐ろしい長さにな
る。その首はなぜかやわらかい魅
惑をもち、なぜかめがたにたい快
感をふくみ、世界中の人間をとり
えて、ますますあの単純な人間の
歴史の進行に熱中させる。本質的
に残酷であり、表面的に魅惑(こ
わく)的な現代の社会機構のスマ
ーティスな進行から発するこの向

は、したがって現行の社会機構の
しくみの各部の高速度運転の結果
であり、そこには不吉な形成と破
滅の体系化の耳ざわりのよい無音
の音がたれ鼓膜にも微動を与え
ていっているのだ。
それなのに多くの人はこの音に
耳を傾けず、(いや、それどころ
ではない)物質をめぐめる即物的欲
望が、みるみるそのあたらしい機
構の増殖と肥大を許容していった
今日の体制の巨大な、そして細微
にわたるしくみのなかに浸されて
いる。最近よく私はそう思うのだ

が、街をときどき廻っている人間の顔
が、いったいあれは苦悶の表情な
のか、それともあれは随喜の表情
なのか、判別つきかねる顔だと思
うことがよくある。青ずんだ、そ
れでいてどこからうれしげな顔
した顔でみながやたらとせわし
げにとひまわっているのだ。
そのなかにあって、われわれは
どうしたちよいのだろうか。すで
にかなり遠い過去において準備さ
れた結果を一人一人にあまるとこ
ろなくもたらすであろうこの進行

なを、どこからどのようによ手
をつけていったらいいのか。その

2 『聖家族教会』
の尖塔
とてつづかれたが、こうした現
実にむかって、正確な主観的な対
応を起さずとすると、想像を絶
した困難にぶつかることになる。
すでにわれわれはたつぷりと経験
済みである。中央アフリカの密林
地帯に突然置きざりをった人間
よろしく、われわれは目前を覆っ
て鬱蒼と繁茂する今日の文明社会
の体制のなかで、茫然と立ちつづ
す。いったいこれはなんなのか
なっているのか、われわれはいま
どこにいて、どんな状態におかれ
ていて、これからなにをしたらよ
いのか、なにをしなければならな
いのか。

→東松照明写真集「日本」—チンドンより



なり合い、一人一人の人間を貫通
し、浸蝕し、はるか遠くへつれ去
り、さまざまに変質のなかに置き
去ったか、自分自身のなかで、周
圍の人間のなかで、日本全体のな
かで想起してもらいたい。戦争と
占領と、古くから続くわれわれの
残酷な歴史と今日の物質状況のな
かに投げ込まれている人間の状況
と、それらが一九六〇年を契機に
その前とその後と、それがどのよ
うに変わり、今日の事態へと進行し
てきたか——を考えると、その重
要な六〇年の前後にかけて、それ
からその後、いま六七年にかけて
彼が執拗に追求した「日本」の諸
相の、いかに重要な意味を今日の
われわれにもたらすものかを理解
することができるとする。六〇年
に「ゴースト」(1月・9月)
号に「連載された「家」と、同
二、三月号)、「アサヒカメラ」(1
2、3月号)、「中央公論」(4月
号)などに掲載された「占領」と、
この二つの仕事は同時に六〇年と
いう年に発表された。この二つの
東松照明という写真家が、どのよ
うな問題に向って、なにをこかを
明らかにしようとする写真家であ
るかを明らかにする一つの事例で
ある。今日においても、われわれ
の存在を大きく規定している重
大な事件として(一つは上からわ
れわれに覆いかぶさり、もう一つ
は過去からわれわれの根柢へ深く
くいつこんでくる)、この二つの問
題はわれわれの眼前にある。そし
てこの写真集は、その後六七年ま
で撮られていった「占領」が全体
の約三分の一の分量を占め、他の
約三分の二が「吸きたまり」では
じまり「家」に占められる九つの写真
群で占められているのであるが、
たとえば「アサヒカメラ」の「風
景」、「チンドン」といづれも六
二年に発表されたものとそれ以前
のもの、そこにはある意味では
微妙な、またある意味ではかなり
決定的な問題のとりわけ、問題
のとりわけのちがいを認めること
ができるだろう。
こうしたちがいが、彼がた
えず時代の核心に向って問題をえ
ぐつとする写真家であるという
こと、このなによりの証拠である。
いま、きり裂かれた日本の深部
をわれわれは見る。
(CIV)

キャンペーン

状況1967

●一九六七年——一体何が起ったのだろうか？

ベトナム戦争・黒人暴動・中東事変・革新都
政・授業料値上・L.A会議・新ナチ台頭・等

●一九六七年だが我々は生きている！

傍観を許されぬ我々は完全にそれに対する突
破口をふさがれているかに見える。我々は何
をしたらよいのか？何をしなくてはならない
のか？……だが我々は知っている！

突破口の起点は我々自身に他ならぬことを！
我々の疑問は我々の行為でしか明らかになら
ないことを。そして振ることに課せられた義務を
状況67 それは我々の疑問であり、義務で
あり、起点に他ならない。

キャンペーン

状況1966

330円

キャンペーン

状況1965

280円

全日本学生写真連盟

東京都新宿区三栄町25 三栄会館内
電話 東京(三三三) 九四四二番